

書評

峯野龍弘著

『聖なる生涯を渴望した男』

(株式会社ヨベル、155頁、2010年)

山田 泉

著者の峯野龍弘氏は評者の恩師である。私がまだ献身ということも知らずに神学校への聴講を申し出た時に初めてお会いして以来、今尚指導をいただいている。

峯野氏がこの書を出版するに至ったのは、私たちの教団誌に氏が連載している「偉大なる宣教者と息づくホーリネス」のシリーズの中から、ジョン・ウェスレーに関する部分を抜粋し、多少の手を加え、体裁を整えてのことである。それゆえ私は、氏の書かれたウェスレー伝は書物として手にする前に、連載記事として毎月読んでいたものである。この連載は今も続いているロングシリーズであるが、その中からウェスレーについてが書物になって出版されることは知っていたわけではないが、特別に驚きもしなかった。むしろ、そうだろうと思い至るところであった。というのも、著者のウェスレーへの思いは、そばにいるものなら誰もが知るべく、熱いものであるから。

忘れもしない、私たちの教団の発足時、どんな名称を教団につけようかと話合っていたときのこと、氏の口から先ず発せられた言葉が「アルダスゲート」。いろいろな意見が出され、「ウェスレアン・ホーリネス教団」

に決定したが、もしかしたら「アルダスゲート教団」になっていたかもしれない。著者にとって、ウェスレーは信仰の師として学んで尽きない存在であることは、いつの頃からかは私が知る由もないが、知る限りにおいてあの時から少しも変わらない。

むしろ私が驚いたことは、この書が著者の延期された入院中に仕上げられたことである。著者の手術後に不測の事態が起こったこと、かなりの痛みがあり、安静を余儀なくされているとのこと、退院はかなり延びるであろうとの連絡が走り、私たちは先生の速やかな癒しを祈っていた。かくてこの書は、著者のあとがきに記されているように、その延期された入院中に脱稿されたのである。それは、その情報が誤っていたというのではなく、著書の意志の表れであると思う。おそらく原稿を書くに足る健康が備わっていたことなどはなかったであろう。しかし、著者が平常に戻ったならまとまった時間がとれることなど考えにくい立場にあることと、それにもまして、ウェスレーへの熱き思いが困難な状況を超えて執筆完成に導いたのではないかというのは、評者の勝手な推測である。

さて、著者のウェスレーへの熱き思いはウェスレーの何に対してなのか。それがまさにこの書物の題名である「聖なる生涯を渴望した男」であろう。著者にとって「聖」について、「聖なる生涯」について、「聖なる生涯を渴望する」ことについて、それぞれが重要な課題であるのではないかと思う。

この書はまさしくウェスレーの伝記であって、その生涯全体を取り扱っている。生涯は10章に分けて紹介されており、一つ一つの章は、ウェスレーのどの時代も、彼がやがてメソジストの祖となるように導かれた神の摂理があったことを的確に、要点を押さえて記されている。その文章は実に歯切れ良く、弁士のごとく巧みでリズムのある言葉遣いである。ちなみに私は著者のこの優れた語りによって育てていただいた者であるので、読み進めることは、懐かしさと心地よさを覚え、恰も目の前に立って話しておられるかと思うことがしばしばあり、思わずほほえんでしまうことであった。その我が家にいるかのような思いを抱かせてくれるのは、文章だけで

はなく、その内容でもある。著者から直接、授業や集会また交わりの折り、ウェスレーについて教えられたそのウェスレーが当然のことだが、この書物の中に立体的な存在感をもって居るのである。このような文章と内容のゆえに、すべての読者にとっても読みやすく、興味を持たせてくれる力のある書物である。

ウェスレーの生涯の流れは、私たちの教団が親しんで用いてきた『戦う使徒ウェスレー』と通じているが、一般の読者には説明がなくはわからない事について、簡潔で十分な説明がされているのでありがたい。例えば、第一の回心があったといわれる 1725 年、その顕著な変化をもたらした大きな要因である書物とその著者、トマス・ア・ケンピス、ジェレミー・テイラー、ウィリアム・ロー、またジョン・バンヤンについて、第 3、4 章とふたつの章にわたって、それぞれの主張の特色、その与えた影響、ウェスレーの変化について触れている。また、次の 5 章では友であったホイットフィールドとの間に起こった問題、神学的教義についても、わかりやすく、かつ要所を押さえて書かれていることなどが、それである。

そしてこの書のクライマックスとして輝く第 2 の回心は、第 7 章ウェスレー兄弟の霊的一大変革のタイトルで、その位置においてもこの書の中心に来る。先ほどもエピソードとして触れた「アルダスゲート」での出来事である。著者がどれほどアルダスゲートでの出来事に重点をおいているかは、この書全体を通してよく響いていることでわかる。そして「神による霊的転機的個人体験」「聖霊による個人生涯上の神的聖別体験」(11 頁)、「聖化体験」「聖霊体験」「恩寵体験」(100 頁)が、著者を通して語られたそのトーンである。

第 2 の回心 アルダスゲートでの体験について、評者はこのトーンをよく聞き、馴染み、そして祈り求めて来た。私たちの源流である。ここに立ち、ここに生きる。そしてここから進む、と。

アルダスゲートでの体験について、少し目を広げてみたい。ウェスレー伝については著者がその書の「はじめに」の冒頭にこう書いている。「ジョン・ウェスレーの生涯を綴った優れた伝記や評論、研究書などが多数あ

る中で、今さらしかもこのような小冊子を出版する意味の皆無に等しいことを充分弁えながらも、あえて勇を起こして、今ここに小著を出版することにした。」

日本語で読めるものだけでも大小合わせて相当にある。一書一書にそれぞれの視点があろう。この書において、著者は明確な見解を提示している。このアルダスゲートの体験こそが、全人的変革、信仰的一大変革と転機（97頁）であった。そしてこの体験で、「驚くなかれ。神の御業は、始められた。リバイバルの御業である。沈滞し、世俗化した英国国教会の中に、新たな信仰復興の御業が始まったのである。」（101頁）

ウェスレーに関する書の多さは、彼の研究による立場の多さの意味でもある。マルチン・シュミット著『ジョン・ウェスレー伝』の第7章にある〈回心とはどんな意義をもったか〉の項の中で、「決定的で最後のな衝撃をウェスレーに与えたのは、ペーター・ペーラーであった。そしてクリスチアン・ダビドは、ウェスレーの理解を確認させたのである。それにもかかわらず、この二人は特有な、根本的な基礎をすえたわけではなかった。むしろその基礎は、彼が長年にわたって毎日読んでいたギリシア語の新約聖書にあった。」（364頁）

彼のウェスレー伝は幼い頃に身につけた習慣、激しい学びによって得た理解、そして苦悩の末の教理の体験化。一本の継続した信仰の道程が語られていて、そこには飛び抜けた出来事としての回心というより、来たるべくして来た回心が静かにしかし太く描かれているように読んだ。

野呂芳男著『ウェスレー』は、どちらの回心がではなく二つの回心は二つの焦点をもつ楕円のように考え（146頁）、という論の展開で書かれる。

ウェスレーに関する書物のよりどころとなる『日誌』、1738年5月24日は明るさより、その前後の長い重たい空気が、押しつぶすようにのしかかる。しかし、そこに自分の信仰の歩みに思い至るものを感じ、私は共感する。

著者のウェスレー伝はひたすら力強い。書物の題に用いられた「渴望」という言葉に、この書の力強さの理由を見る思いがする。希望、待望、切望でなく、渴望した男の姿を著者はウェスレーに見た。信仰生涯はどうあ

書評『聖なる生涯を渴望した男』

ることが神が与えてくださる真の姿であるか、この追求の強さが「渴望」であった。この書はハンディーなウェスレー入門書でありつつ、神が聖書に明らかにされた、真のキリスト者にならせていただくためのハードな靈性書である。

(ウェスレアン・ホーリネス教団 習志野教会牧師)